〔東京家政大学研究紀要　第50集（1），pp. 151～158〕

女子大学生における親準備性の発達（2）
―入学時の養護性について―

岩治　まとか*，井森　澄江**

（平成21年9月30日受理）

Development of Readiness for Parenthood in Students of a woman's University (2)
Examination of the Nurturance of Student Just Entering the university

Iwaji, Madoka and Imori, Sumie

(Received on September 30, 2009)

キーワード：女子大学生，親準備性，養護性，ソーシャルスキル，愛着
Key words：Students of a woman's University, Readiness for parenthood, Nurturance, Social skills, Attachment

要旨

本研究の目的は，大学で学ぶ4年間で，青年女子がどのように「保護される立場」から「保護する立場」に成長していくのか．また，どうやって「保護する立場」に必要な力を身につけていくのかについて明らかにしようするものであった．

調査対象は，大学に入学した直後の95名の女子大学生である．調査の質問紙は，幼児期の親との関係（就学前の母子関係尺度），中学高校時期の親との関係（IPA尺度），現在の親を中心とした対人関係のあり方（IWM尺度），ソーシャルスキルに関する項目，養護性に関する項目からなる．

本報告では，養護性とソーシャルスキルとの関連．養護性と幼児期，中学高校時期，現在の親を中心とした対人関係のあり方との関連について検討した．その結果，幼児期の親との関係（就学前の母子関係）では養護性との関連が深いことが示された．また，中学高校時期（IPA）では養護性の中でも特に「親に対するポジティブな感情」と関連が深く，現在の親を中心とした対人関係（IWM）では，ソーシャルスキルとの関連が深いことが示された．また，養護性とソーシャルスキルには多くの関連が認められ，ソーシャルスキルを高めることが，養護性を高めることに繋がることが示唆された．

＊人文学部教育福祉学科・心理教育学科資料室
＊＊人文学部発達心理研究室

問題と目的

本研究の目的は，大学で学ぶ4年間で，青年女子がどのように「保護される立場」から「保護する立場」に成長していくのか．また，どうやって「保護する立場」に必要な力を身につけていくのかについて明らかにしようするものである．報告（1）では，主に大学に入学した直後の女子大学生のソーシャルスキルについて検討すると共に，幼児期から現在までの愛着関係のあり方との関連を検討する．報告（2）では，大学に入学した直後の女子大学生の養護性について検討すると共に，幼児期から現在までの愛着関係のあり方との関連について検討する．また，養護性とソーシャルスキルとの関連についても検討していく．

エリクソンは，人間を身体的・心理的・社会的存在としてとらえ，成人期の発達課題として「世代性:generativety（生殖性）」をあげている．『世代性』とは「次世代を支えていく子どもたちや，次世代に役立つ価値を産出し，はぐくみ，時間をかけて育てていくことに関する積極的関与」である．

筆者らも，この「世代性」成人期の課題が順調に遂行されるための先行資質として，「育児性」や「次世代育成力」，「養護性」，「親準備性」が重要であると考え，これまで「養護性」を取り上げて研究してきた．

井森・岩治ら（2004），岩治（2005）では，養護性の形成を青年期の重要な課題として捉え，青年期の養護性に関して尺度の構成を試みると共に，養護性の発達に影響を与えると思われる要因との関連について検討した．また岩治・井森（2008）では，青年期後期の養護性が乳幼児期から現在までの親子関係，すなわち愛着や親の養育態度・行

動とどのように関連しているのかについて，女子大学生によって書かれた生育史を分析することにより検討した．その結果，現在および過去の安定的な愛着関係は，養護性に対してポジティブで安定したイメージを与えること．男性においては現在の対人関係が，女性においては就学前の母子関係が養護性と関連が深いことが示唆された．また，親との関係が良好であることは，養育経験を肯定的に受け止めることにつながり，養護性を高めること等が示された．

George&Solomon（1996,1999）は，養育システムを自分の中に構築するプロセスの一部分として，個人は思春期から妊娠期・出産期にかけて，幼い子どもに保護を与える養育者としての自分の表象を，今までの「アタッチメントしている者」としての表象に対応させつつ，しかし，個別に構築することになるとし，養護性の発達にとって青年期の重要性を指摘している．

また，養育システムは，その発達的な根源を子ども時代のアタッチメント関係の文脈における，自己と他者についての内的作業モデルに持つが，標準的な条件下では，アタッチメントシステムとは別に養育システム自体が発達するとしている．また，これら2つのシステムは同じスピードで発達するのではないし，あるいは，同じ感受期を共有しているわけでもないが，養育についてのIWMの構築は，アタッチメントのIWMの構築と対応して進行するとしている（George&Solomon,1996,1999）．

本研究では，青年期の重要性を指摘しているこの理論に基づき，大学で学ぶ4年間で，青年女子がどのように「保護される立場」から「保護する立場」へと成長していくのか．またどうやって，「保護する立場」に必要な力を身につけていくのかを，養護性の発達と変化を追うことにより検討していく．

また，養護性の発達に重要な意味をもつ指標として，これまでにも関連が指摘されている愛着を取り上げると共に，本研究では，養護性の具体的な行動指標としてソーシャルスキルを取り上げ，その関連を検討していく．

本報告（2）では，1）大学に入学した直後の女子大学生の養護性を測定し，その特徴を捉えること．2）養護性とソーシャルスキルとの関連について検討すること．3）養護性と幼児期からこれまでの愛着関係のあり方との関連について検討することを目的とする．

方法

1. 対象者：首都圏のＡ女子大学1年生95名（全員この研究の対象者になることに同意）
   年齢18～19歳
2. 実施時期；2009年4月上旬
3. 実施方法；入学直後のオリエンテーションの最後に調査への協力を依頼し，質問紙を配布，その場で回答してもらった（回答時間は20分程度）．
4. 調査内容：学籍番号，年齢，家族構成，年下の子どもの世話経験等を含むフェイスシートと，次のような文章完成式設問および選択肢式設問からなる．

〈文章完成項目〉

(1)「私にとって大学とは_____」「私にとって母とは_____」「私にとって父とは_____」「私にとって友だちとは_____」「私にとって子どもとは_____」「私にとって尊敬すべき人とは_____」の6項目について，それぞれ2文ずつ作成してもらった．

〈選択肢式設問〉

ソーシャルスキルに関する質問項目

(2)「ＱＵ尺度中学生用」：ＱＵ尺度の中にあるソーシャルスキルに関する尺度から，対人関係を営むために必要なスキルである，「配慮尺度4項目」「かかわり尺度5項目」の計9項目について，「1．ほとんどしていない」から「4．いつもしている」までの4段階で評定してもらった．

(3)「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」（相川・藤田,2005）：ソーシャルスキルをコミュニケーションスキルと対人スキルの2つの側面からとらえた尺度であり，「関係開始尺度8項目」「解読8項目」「主張性7項目」「感情統制4項目」「関係維持4項目」「記号化4項目」の計35項目について，「1．ほとんどあてはまらない」から「4．かなり当てはまる」までの4段階で評定してもらった．

愛着に関する質問項目

(4)「ＩＰＡ尺度」（井上ら,2006）：中学高校時代の親との関係について，「信頼6項目」「コミュニケーション6項目」「疎外6項目」の計18項目について，「1．ほとんど当てはまらない」から「4．かなり当てはまる」までの4段階で評定してもらった．

(5) 成人愛着内的ワーキングモデル尺度（戸田・琢磨,1988），就学前の母子関係尺度（酒井, 2001）：現在の愛着を測定する内的作業モデル（IWM）について，「安定性6項目」「アンビバレント性6項目」「回避性6項目」の計18項目と，就学前の母子関係に関する尺度16項目のうち，「就学前の安定的な母子関係3項目」「就学前の拒否的な母子関係3項目」「就学前のアンビバレントな母子関係3項目の計9項目，合わせて27項目について，「1．全くそう思わない」から「4．非常にそう思う」までの4段階で評定してもらった．

(6) 養護性尺度（岩治, 2004）：中西・栗津（1997）の養護性尺度61項目のうち52項目，小野寺（2003）の可能自己尺度7項目のうち6項目，伊藤（2003）の子ども・子育てに関する意識尺度8項目のうち2項目，

伊藤（2003）の同性の親への同一視・性受容尺度3項目の計63項目について，「1．全くそう思わない」から「4．非常にそう思う」までの4段階で評定してもらった．

5.本報告で分析する設問：本研究では主に設問（3）（4）（5）（6）の回答について分析を行う．

結果と考察

本研究で分析対象となった被験者は，報告（1）で示された通り，対象者95名のうち質問紙の各尺度にすべて回答していた90名である．

1．大学に入学時点における養護性について

本研究では，岩治が2005年に行った養護性尺度63項目についての因子分析（男子学生170名，女子学生161名，平均年齢20.97歳）によって示された，46項目6下位尺度を使用し分析を行った．これは，「子ども・赤ちゃんへの関心（17項目）」「親に対するポジティブな感情（10項目）」「親になることへの積極的志向（5項目）」「奉仕的な志向（5項目）」「将来の子育てに対するネガティブな予測（4項目）「動植物への関心（5項目）」からなる．（Table1）

各下位尺度得点は，各尺度の項目の得点を合計することにより算出した（Table2）．

まず，2005年の研究で得られた尺度得点を以下に示す．2005年の研究では，大学，大学院，医療系専門学校の男女学生387名，有効回答数331名（男子学生170名，女子学生161名）を対象に実施した．学生の学部は，産業，工学，法学，医療，心理，器楽などであり，学びの分野が一つに偏ることなく，一般的な大学生で構成されたものであった．

男子学生の得点は，「子ども・赤ちゃんへの関心：46.84」「親に対するポジティブな感情：28.28」「親になることへの積極的志向：14.71」「奉仕的な志向：11.08」「将来の子育てに対するネガティブな予測：9.24」「動植物への関心：13.49」であり，女子学生の得点は「子ども・赤ちゃんへの関心：51.94」「親に対するポジティブな感情：30.27」「親になることへの積極的志向：15.63」「奉仕的な志向：12.14」「将来の子育てに対するネガティブな予測：9.55」「動植物への関心：14.04」であった．また，大学生全体での得点は「子ども・赤ちゃんへの関心：49.32」「親に対するポジティブな感情：29.25」「親になることへの積極的志向：15.15」「奉仕的な志向：11.61」「将来の子育てに対するネガティブな予測：9.39」「動植物への関心：13.76」であった．

Table1　養護性（46項目）

項目
Ⅰ．子ども・赤ちゃんへの関心　（17項目）
1．赤ちゃんを見ても、別にかわいいとは感じない
2．幼児の相手をうまくやれると思う
3．小学生の遊び相手になれそうである
4．赤ん坊の泣き声を聞くとイライラすることがある
6．幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる
7．小さい子どもの相手は苦手である
8．テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもって見る
9．子どものこころの動きに興味がある
10．幼い子どもが泣いていると、何とかしたいと思う
12．子どもはあまり好きではない
14．幼児の姿をつい目で追っていることがある
17．子どもが遊んでいるのを見るのはおもしろい
18．小さい子どもに頼られると嬉しい
19．遊んでいる子どもの歓声をうるさいと感じる
23．保育所や幼稚園の前を通りかかると、中をのぞきたくなる
24．小さな子どもに関心がある
63．子どもとはおもしろい存在だと思う
Ⅱ．親に対するポジティブな感情　（10項目）
36．自分の父親のようになりたい。　36．自分の母親のようになりたい
37．現在の自分に満足している
39．自分は良い母親を持ったと思う
45．母親は自分の気持ちをよく理解してくれた
48．親が自分にしてくれたことをいろいろ思い出す
53．母親について良い思い出があまり浮かばない
55．親が育ててくれたように自分の子どもを育てたい
57．父親は自分をかわいがってくれたと思う
60．以前に親と楽しく過ごしたときのことを思い出す
62．子ども時代に父親との接触は多くなかった
Ⅲ．親になることへの積極的志向　（5項目）
21．将来、親になった時のことを想像することがある
25．将来、子どもと遊んでいる自分の姿を想像する
42．出来れば自分も親となって子どもを育てようと思う
49．自分は子どもを育て、良い親になろうと思っている
51．将来、育児を楽しんでいる自分の姿を想像することがある
Ⅳ．奉仕的な志向　（5項目）
26．人の世話が好きである
41．人からよく「世話好き」であると言われる
44．福祉方面の仕事に興味がある
52．ボランティア活動には積極的に参加したい
59．障害を持つ人を援助する職業は自分には向かない
Ⅴ．将来の子育てに対するネガティブな予測　（4項目）
34．将来、子育てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する
40．将来、毎日の生活に疲れ果て、イライラしている自分を想像する
46．将来、泣く赤ちゃんを前にして、途方に暮れている自分を想像する
58．将来、子どもをうまく育てられるか心配である
Ⅵ．動植物への関心　（5項目）
5．動物を飼うことに興味がない
11．草花を育てることに興味がある
16．雨に濡れた迷子の犬などを見ると可哀想に思う
22．捨てられた動物がどうなったか、いつまでも気になる
27．枯れかけている植物を見ると、気がかりである

今回得られた各下位尺度得点は，「子ども・赤ちゃんへの関心：52.58」「親に対するポジティブな感情29.63」「親になることへの積極的志向15.74」「奉仕的な志向：14.29」「将来の子育てに対するネガティブな予測：9.73」「動植物への関心13.03」であり，2005年の研究で得られた女子学生の得点よりも，「親に対するポジティブな感情」と「動植物への関心」において多少低い傾向が示された．しかし，その他の尺度得点では2005年を上回る得点が得られており，大学に入学した直後の養護性は，高い傾向にあると言える．

また，今回の対象者の大きな特徴として「奉仕的な志向」の得点が高く示されたことが上げられる．これは，今

Table2　養護性尺度の下位尺度得点

	今回平均値 (SD)	2005平均値 (SD)	今回項目平均 (SD)	2005項目平均 (SD)
子ども・赤ちゃんへの関心：17項目	52.58 (7.34)	51.94 (8.78)	3.10 (0.43)	3.06 (0.52)
親に対するポジティブな感情：10項目	29.63 (4.63)	30.27 (5.31)	2.96 (0.46)	3.03 (0.51)
親になることへの積極的志向：5項目	15.74 (3.15)	15.63 (3.22)	3.15 (0.63)	3.13 (0.64)
奉仕的な志向：4項目	14.29 (2.06)	12.14 (2.93)	2.86 (0.42)	3.04 (0.73)
将来の子育てに対するネガティブな予測：4項目	9.73 (2.23)	9.55 (2.16)	2.43 (0.55)	2.39 (0.54)
動植物への関心：5項目	13.03 (2.09)	14.04 (2.61)	2.60 (0.42)	2.81 (0.52)

回対象にした学生が福祉や教育，心理の分野を学び，人の援助に関わる学問領域を専攻していることが関係していると考えられる．

なお，各下位尺度の項目数で除して求めた各尺度得点は，「子ども・赤ちゃんへの関心：3.10」「親に対するポジティブな感情：2.96」「親になることへの積極的志向：3.15」「奉仕的な志向：2.86」「将来の子育てに対するネガティブな予測：2.43」「動植物への関心：2.61」「養護性：2.94」であった．

2. 養護性とソーシャルスキルとの関連

養護性とソーシャルスキルとの関連を検討するため，養護性の6つの各下位尺度得点とソーシャルスキルの6つの各下位尺度得点について相関係数を算出し検討した．なお，ソーシャルスキル尺度得点については6つの下位尺度のうち，他の下位尺度とは異質である「感情統制」を除いた5つの下位尺度得点の合計を使用した．

その結果（Table3），養護性の各下位尺度とソーシャルスキルの各下位尺度との間では，「子ども・赤ちゃんへの関心」と「関係開始（r=.22）」「関係維持（r=.30）」「記号化（r=.25）」との間に弱い正の相関がみられた．「親に対するポジティブな感情」では，「関係開始（r=.27）」「主張性（r=.24）」「感情維持（r=.25）」「記号化（r=.34）」との間に弱い正の相関がみられ，「感情統制（r=-.28）」との間に，弱い負の相関が示された．「親になることへの積極的志向」については，「感情統制」を除く，「関係開始（r＝.32）」「解読（r＝.23）」「主張性（r＝.22）」「関係維持（r＝.31）」「記号化（r＝.26）」の下位尺度間で弱い正の相関がみられた．「奉仕的な志向」では，「関係開始（r=.25）」「解読（r=.21）」「関係維持（r=.30）」との間に弱い正の相関が示された．また，「将来の子育てに対するネガティブな予測」との間には，「関係開始（r=-.31）」「主張性（r=-.27）」「記号化（r=-.28）」との間に弱い負の相関が示された．

なお，養護性とソーシャルスキルの各下位尺度間では，「関係開始（r=.28）」「関係維持（r=.38）」「記号化（r=.32）」との間に弱い正の相関が示され，ソーシャルスキルと養護性の各下位尺度間では，「子ども・赤ちゃんへの関心（r=.24）」「親に対するポジティブな感情（r=.31）」「親になることへの積極的志向（r=.35）」「奉仕的な志向（r=.28）」との間に弱い正の相関がみられた．また，「将来の子育てに対するネガティブな予測（r=-.32）」との間には弱い負の相関が示された．

なお，「養護性尺度」と「ソーシャルスキル尺度」との間には弱い正の相関がみられた（r=.32）．

このように，養護性の下位尺度である，「子ども・赤ちゃんへの関心」や「親に対するポジティブな感情」「親になることへの積極的志向」や「奉仕的な志向」，「将来の子育てに対するネガティブな予測」は，ソーシャルスキルの「関係開始」「関係維持」「記号化」との間に，関連が多くみられ，関わりが深いことが示唆された．

「関係開始」は，初対面の相手と関係を構築していくために必要なスキルであり，「関係維持」は，もともと持っている関係を維持していくために必要なスキルである．また，「記号化」は，相手に自らの意思を伝えるために行う，エンコーディングに関わるスキルである．

また，「親に対するポジティブな感情」や「親になることへの積極的志向」「将来の子育てに対するネガティブな予測」は，ソーシャルスキルの「関係開始」「関係維持」「記号化」との関連以外にも，相手の意思を尊重しながらも，自分の意思を抑えることなく相手に伝えるスキルである，「主張性」との間に関連が示されていた．

さらに，「親になることへの積極的志向」や「奉仕的な志向」では，ソーシャルスキルの「関係開始」「関係維持」「記号化」との関連の他に，「解読」との関連が示された．この「解読」は，個人が相手の意思を受け取るために行う，ディコーディングに関わるスキルである．

赤ちゃんや子どもの世話をするときには，対象とする子

Table3　養護性とソーシャルスキルとの関係

	関係開始	解読	主張性	感情統制	関係維持	記号化	ソーシャルスキル（感情統制を除く）
子ども・赤ちゃんへの関心	.22*	.10	.10	−.03	.30**	.25*	.24*
親に対するポジティブな感情	.27*	.10	.24*	−.28**	.25*	.34**	.31**
親になることへの積極的志向	.32**	.23*	.22*	.03	.31**	.26*	.35**
奉仕的な志向	.25*	.21*	.14	.05	.30**	.19	.28**
将来の子育てに対するネガティブな予測	−.31**	−.15	−.27*	.02	−.14	−.28**	−.32**
動植物への関心	−.05	.02	−.08	−.08	.09	.04	−.02
養護性	.28**	.16	.16	−.12	.38**	.32**	.32**

** p<.01　　* p<.05

どもや赤ちゃんの要求を的確につかみ，その要求に対して的確に応じることが必要である．これはまさに，ソーシャルスキルの「解読」のスキルであり，また，同時にその要求に応じるための技能として，子どものこころに共感できることや，実際にいつ，どのようなタイミングで子どもを抱いたり，ミルクを与えたりすればよいかという，「関係開始」や「関係維持」などのスキルが必要であると考えられる．

このように，子どもの要求をどのように読み取るかや，子どもとどのように関わりを持っていくかは，ソーシャルスキルそのものであり，ソーシャルスキルを高めることが，養護性を高めることに関係し，さらに養育に対するスキルも高めることが示唆される．

3. 養護性とこれまでの対人関係のあり方との関連

養護性と就学前の母子関係・IPA・IWM との関連を検討するため，養護性の6つの各下位尺度得点と就学前の母子関係の3つの下位尺度得点，IPAの3つの下位尺度得点及びIWMの3つの下位尺度得点の計9つの各下位尺度得点について相関係数を算出し検討した（Table4）．

就学前の母子関係と養護性との間には，「就学前の安定的な母子関係」と「子ども・赤ちゃんへの関心（r = .86）」「親に対するポジティブな感情（r = .24）」「親になることへの積極的志向（r = .52）」「奉仕的な志向（r = .31）」との間に中程度から高い正の相関がみられ，「将来の子育てに対するネガティブな予測（r = -.21）」との間に弱い負の相関がみられた．「就学前の拒否的な母子関係」では「親に対するポジティブな感情（r = -.43）」との間に中程度の負の相関が示され，「将来の子育てに対するネガティブな予測（r=.42）」との間に中程度の正の相関がみられた．

IPAと養護性との間には，「信頼」と「親に対するポジティブな感情（r=.67）」との間に高い正の相関が示され，「コミュニケーション」との間にも「親に対するポジティブな感情（r=.41）」との間に中程度の正の相関がみられた．また，「疎外」では「親に対するポジティブな感情（r=-.42）」との間に中程度の負の相関が示され，「将来の子育てに対するネガティブな予測（r=.45）」との間に中程度の正の相関が示された．

IWMと養護性との間には，「安定性」と「親に対するポジティブな感情（r=.42）」「親になることへの積極的志向（r=.34）」「奉仕的な志向（r=.29）」との間に中程度の正の相関がみられ，「将来の子育てに対するネガティブな予測（r=-.27）」との間に弱い負の相関がみられた．「回避性」では「子ども・赤ちゃんへの関心（r=-.23）」「親に対するポジティブな感情（r=-.33）」との間に弱い負の相関が示され，「将来の子育てに対するネガティブな予測（r=.28）」との間に弱い正の相関が示された．また，「アンビバレント性」では「親に対するポジティブな感情（r=-.28）」との間に弱い負の相関がみられ，「将来の子育てに対するネガティブな予測（r=.38）」との間に弱い正の相関が示された．

このように，養護性と就学前の母子関係・IWMとの関連については，これまでの研究と同様の結果が得られ，就学前の安定的な母子関係と養護性の各下位尺度との間に関連が多く見られた．特に，就学前の安定的な母子関係と養護性との関連は強く，中でも「子ども・赤ちゃんへの関心」において強い相関が示された．また，IPAでは「親に対するポジティブな感情」との間に関連が多く示され，特に「信頼」との間に強い関連が示された．

George & Solomon（1996）によれば，養育表象を自分の中に構築するプロセスの一部として，個人は幼い子どもに保護を与える養育者としての自分の表象を，これまでの「愛着するもの」としての表象に対応させつつ，しかしそれとは個別に構築すると考察している．そしてこの「養育するもの」としての自分を構築する過程において，①私は将来子どもを守ることができるだろうか．②私は子どもを保護したいとのぞむだろうか．という2つの問いを自分に発し，この問いが発せられることにより，これまでの親と一緒にすごした幼少期や学童期などの親子関係を必然的に振り返ることになるとしている．

本研究においても，中学高校時期の親との関係が「親に対するポジティブな感情」と関連していることが示され，中学高校時期にあたる思春期から青年期にかけての時期が，親との関係を振り返る重要な時期であり，また，養護性の獲得においても重要な意味を持つ時期であることが示唆された．

Table4　養護性と就学前の母子関係・IPA・IWMとの関係

	就学前安定	就学前回避	就学前アンビバレント	信頼	コミュニケーション	疎外	安定性	回避性	アンビバレント性
子ども・赤ちゃんへの関心	.86**	-.15	.01	.19	.09	-.01	.16	-.23*	-.09
親に対するポジティブな感情	.24*	-.43**	.09	.67**	.41**	-.42**	.42**	-.33**	-.28**
親になることへの積極的志向	.52**	-.11	-.02	.22*	.05	-.02	.34**	-.06	-.14
奉仕的な志向	.31**	.08	.01	-.12	-.06	.17	.29**	-.08	-.02
将来の子育てに対するネガティブな予測	-.21*	.42**	.06	-.17	.05	.45**	-.27*	.28**	.38**
動植物への関心	-.06	.06	.13	-.09	.01	.06	-.12	.05	.10
養護性	.72**	-.17	.06	.34**	.12	-.04	.31**	-.23*	-.11

** p<.01　* p<.05

まとめ

1. 大学に入学時点における養護性について

大学に入学した直後の養護性に関しては，2005年の研究で得られた得点と比較して，「親に対するポジティブな感情」及び「動植物への関心」が多少低い得点をしめしたが，養護性としては高い傾向が示された．また，特に「奉仕的な志向」の得点が高かった．これは，今回対象になった学生が福祉や教育，心理の分野を学び，人の援助に関わる学問領域を専攻していることが関係していると考えられる．

2. 養護性とソーシャルスキルとの関連

養護性の下位尺度とソーシャルスキルの下位尺度の関係から，養護性とソーシャルスキルには多くの関連が認められ，ソーシャルスキルを高めることが，養護性を高めることに繋がることが示唆された．

また，養護性スキルの開発には，初対面の相手と関係を構築していくために必要なスキルである「関係開始」スキルや，もともと持っている関係を維持していける「関係維持」スキルのような，対人場面において実際に必要とされる具体的なスキルが備わっていることが重要であることが示唆された．加えて，相手に自らの意思を伝えるために行う，エンコーディングに関わるスキルである「記号化」のような，コミュニケーションに関わるスキルの開発が重要であることが示唆された．

さらに，「親に対するポジティブな感情」や「親になることへの積極的志向」「将来の子育てに対するネガティブな予測」のような，親から受けた養育に対する認知や，将来の養育に対する意識は，「関係開始」や「関係維持」「記号化」に加えて，相手の意思を尊重しながらも，自分の意思を抑えることなく相手に伝えるスキルである「主張性」と関連があることが示された．

また，「親になることへの積極的志向」や「奉仕的な志向」など，ポジティブな養育感情や世話に対する意識についても，「関係開始」や「関係維持」「記号化」との関連の他に，個人が相手の意思を受け取るために行う，ディコーディングに関わるスキルである「解読」との関連が示唆された．

3. 養護性と愛着との関連

養護性尺度と就学前の母子関係及びIPA，IWMとの関連について，これまでの研究でも示された通り，就学前の母子関係と養護性との間に関連が多く示された．また，IWMと養護性との間にも多くの関連が示された．特に，就学前の安定的な母子関係と養護性との関連は強く，中でも「子ども・赤ちゃんへの関心」において強い相関が示された．

IPAと養護性との関連では，「親に対するポジティブな感情」との間に関連が多く示され，特に「信頼」との間に強い関連が示された．中学高校時期にあたる思春期から青年期前期の時期は，親との関係を振り返る重要な時期にあたり，また，養護性の獲得においても重要な意味を持つ時期であることが示唆された．

今後の課題

今回の研究において用いたソーシャルスキルは，ソーシャルスキルを「コミュニケーション・スキル」および「対人スキル」の2側面から測定することのできる尺度であった．しかし，ソーシャルスキルの概念が包括的であることを考えると，この2つのタイプのスキルから構成されていた尺度とはいえ，ソーシャルスキルのごく一部を測定していたに過ぎないと言える．また，ソーシャルスキルの定義をどのように見据えるのか．また，どのような側面から構成するかによって，測定されるソーシャルスキルは変わってくることになり，養護性等との関連も変化すると考えられる．よって，本研究でえられた結果は，今回使用した尺度によるものであるところが大きく，一般的なソーシャルスキルとの関連として解釈することは危険である．

今後，どのような内容をソーシャルスキルとして据えるかを検討し，ソーシャルスキルの定義および構成を見直した上で，再度，養護性等との関連を検討する必要がある．

また，養護性の具体的な行動レベルを図る指標として，どのようなものが考えられるかも含め，検討する必要がある．

なお，大学生がどのように「保護される立場」から「保護する立場」へと発達していくのかを検討するには，その過程を追う必要があり，今後も縦断的な研究が必要である．

付記

本研究の調査に協力して下さいました受講生の諸姉に感謝いたします．

引用・参考文献

相川充・藤田正美　2005　成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成　東京学芸大学紀要1部門　56　p87-p93

青柳肇・酒井厚　1997　アダルト・アタッチメントと回想による幼児期のアタッチメントとの関係　早稲田大学人間科学研究　第10巻　p7-p16

Bem,S.C. 1974 The measurement of psychological and rogyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology vol.42 p115-p162

Erikson,E.H.　小此木啓吾（訳編）　1973　自我同一性―アイデンティティとライフサイクル　誠信書房（Erikson, E.H. 1959 Identity and the life cycle. New York: International University Press.）

Fogel,A.D. & Melson,G.F.　マカルピン美鈴（訳）　1989　子どもの養護性の発達　小嶋秀夫（編）乳幼児の社会的世界　有斐閣　p170-p186（Fogle,A.D.&Melson,G.F. 1986 Origins of Nurturance. Hillsdale,N.J:Lawrence Erldaum Associates）

George,C., & Solomon,J. 1996 Representational Models of Relationships:Links Between Caregiving and Attachment. Infant Mental Health Journal. vol.17（3）p198-p216

George,C., & Solomon,J. 1999 Attachment and Caregiving. In J.Cassidy & P.R.Shaver（Eds.）, Handbook of Attachment. Guilford　p649-p670

Hazan,C.,&Shaver,P.R.　1987　Romantic love conceptualized as an attachment process. Journal of Personality and Social Psychology　vol.52（3）　p511- p 524

井森澄江・岩治まとか・清水宏子・大井京子　2004　青年期女子の養護性の発達（1）　日本教育心理学会第46回総会論文集　p376

井上健治・久保ゆかり（編）　1997　子どもの社会的発達　東京大学出版会

井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江・斉藤こずゑ　2006　親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ―PBIとIPAの尺度の再検討―東京家政大学研究紀要　第46集（1）　p245-p251

井上義朗・深谷和子　1983　青年の親準備性をめぐって　周産期医学　第13巻　第12号　p2249-p2252

伊藤葉子　2003　中・高校生の親準備性の発達　日本家政学会誌　第54巻　第10号　p801-p812

岩治まとか　2005　青年期男子の養護性の発達　日本発達心理学会第16回大会総会発表論文集

岩治まとか　2005　青年期における養護性の検討　東京家政大学大学院文学研究科修士論文

岩治まとか・井森澄江　2008　女子青年における“乳幼児期から現在までの親との関係”と“養護性”―回顧法による生育史の分析をもちいて―　東京家政大学附属臨床相談センター紀要　第8集　p19-p35

岩治まとか　2009　大学生における養護性の検討　東京家政大学研究紀要　49（1）人文社会科学　p133-p142

数井みゆき　2002　養育システムの発達―愛着システムとの関連についての一考察―　茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）　第51号　p45-p63

小嶋秀夫・河合優年　1988　乳児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究　昭和62年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書

小嶋秀夫　1991　親となる過程の理解　我妻堯・前原澄子（編）　助産学講座3　母性の心理・社会学　医学書院　p 89- p 111

中西由里・栗津幹子　1997「養護性（nurturance）」に関する一研究（２）―妊婦と未婚学生の比較―　椙山女子学園大学女子学園大学研究論集　第28号（社会科学篇）　p81-p89

小野寺敦子　2003　親になることによる自己概念の変化　発達心理学研究　第14巻　第2号　p180-p190

酒井厚　2001　青年期の愛着関係と就学前の母子関係―内的作業モデル尺度作成の試み　性格心理学研究　第9巻　第2号　p59-p70

Solomon,J., & George,C. 1996 Defining the Caregiving System:Toward a Theory of Caregiving　Infant Mental Health Journal vol.17（3）　p183-p197

詫摩武俊・戸田弘二　1988　愛着理論からみた青年の対人態度―成人版愛着スタイル尺度作成の試み―　東京都立大学人文学報　第196巻　p1-p16

Abstract

The purpose of this study was, how the adolescent girls will grow up to a “position to be protected” from a “position to protect” in four years studying at the university. And this research examines how to acquire power necessary for “protected standpoint”.

The subjects of the study were 95 female university students. The questionnaire, included questions about attachment and nurturance and social skills on a self-rating scale for adults scale.

The mother-child relationship in preschool period, the parental attitude of the junior high school period, and high school period and attachment in young adults were examined. The relation between attachment and the social skill nurturance was examined.

The relation of a preschool mother-child dyad to protection is deep. It is deeply related to “Positive feelings to parents” and parental attitude of the junior high school period and high school period. A lot of relations were admitted in nurturance and the social skill. So it was suggested that to connect with the upbringing, improving the social skill of nurturance is important.